

硯

滴

考

[7]

大平正芳の政治哲学 香山健一30	大平正芳氏のこと ヘンリー・A・キッシンジャー	大平正芳君の思い出 田中角榮	青年との対話 (その1)青年との対話 (その1)
30	25	12	4

#### はしがき

硯滴考シリーズ第7号をお届けします。

大平は若者との対話をこよなく愛し、後援会にも青年の会を複数持っていました。今回は

その機関紙に掲載の「青年との対話」(その1)を選びました。

前者は盟友の盟友たる所以を縦横に語る中で、戦後の歴史を画した池田・佐藤・田中・大平 さらにここで待望の田中角栄総理とヘンリー・A・キッシンジャー米国務長官の登場です。

政権時代の貴重な証言でもあります。後者は日本の政治家には辛辣だと自他ともに認める同

長官の注目の大平評です。

院大学教授)の本格的大平論をご堪能ください。 本号の主論文としましては、大平の政策ブレーントリオのお一人・故香山健一先生 (学習

前号に引き続き、ご高覧・ご高評を賜れば幸甚です。

令和二年九月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

## 青年との対話 (その1)

社)に収録。大平にとっては、東京・大阪の「雄心会」とともに、有為 以降で紹介予定。 た。その中から選ばれた論考です。紙幅の都合で後半(その2)は次号 な若者へのメッセージ発信の場となり、会員の青雲の志を大いに鼓吹し 載。 『春風秋雨』 (大平財団・昭和41年)、 『大平正芳全著作集』 2巻 大平を囲む郷里の青年の会「芳友会」の機関誌『芳友』(昭和40年) (講談 に所

おるが、次の数片はその機関誌に寄せた私の断想である。私は郷里に芳友会、東京と大阪に雄心会という青年の集りをもって

#### 友情

る。栄光を浴びる舞台もあれば、辱しめに耐えなければならない局面もある。 人の一生には、悦びもあれば憂えもある。得意にふくらむ朝もあれば失意に沈む夕もあ

は嫉視を招きやすく、恥辱は人生の深淵をのぞき見る機縁ともなる。愉悦と悲哀、得意と失 禍の根はおうおうにして得意の時に生じ、福の種は隠微の間に蒔かれることが多い。

意、栄光と恥辱、それらは別のものではなく本来一如であるといえよう。 この人生の浮沈と哀歓を貫ぬいて、われわれを支え励ましてくれるものは、名声でもなく

地位でもなく、財産でもない。それは至純な友情である。

私は親愛なる芳友会の諸兄姉が、終始渝らない至純にして強靱な友情を絆として、お互い底の底まで分解究明すれば、友情という中核体につき当るものである。 友情の本体は、お互いの尊敬に根ざした理解と献身というものである。 われわれの人生を

支えとなることを確信するからである。(四○・七・一○) れることを祈ってやまない。それがそのまま国家と郷土のためになり、諸君をめぐる社会の の日常生活を充し、お互いの人生をそれぞれの立場において、傑作たらしめることに精進さ

## 民主主義―マッチーニの言葉

変革を意図するものも、穏健着実な前進を願うものも、 民主主義という言葉は大変調法なものである。洋の東西、 攻撃するものも守るものも、 思想の左右を問わず、急進的な 一様に

民主主義という言葉を、自分の味方にすることを忘れないようである。

でわからない、えたいの知れない言葉ではある。このようなことでは民主主義の神様が戸 何でも学者によると、民主主義という言葉の定義は六百幾つもあるそうで、わかったよう

惑っておるにちがいない。そう勝手に使われては迷惑だといっておられはしまいか。 るすべての人のためになる善をいうのだ」と喝破しておられる。 人である。この人は「民主主義ということは最も賢明な指導の下における、すべての人によ イタリアの哲人政治家にマッチーニという人があり、その正しい主張のゆえに獄死された

る このいう賢明なリーダーシップというものではあるまいか。 に真実を訴え、 ないばかりか、国家と社会を滅亡と破壊に導くことになる。その破局を避けるためには、人 人間というものは、労苦よりも安逸を求め、生活の低きよりも高きを求めたがるものであ 政治がこの人間の本能に迎合して、その御機嫌をとるばかりでは、その人のためになら 困難を説き、それ相当の犠牲を求めなければならない。このことがマッチー (四〇・九・一〇)

### 三 アデナウアーの述懐

西独の前首相アデナウアー氏は、このほど九十歳の誕生日を迎えてこういっている。

あったことを誇りに思っている。 私は、 九十年の生涯を回顧して、私に与えられた義務に、 私自身がともかくも忠実で

どうか、という物さしで計っておられるのだ。われわれは、われわれの家庭に対し、社会に 名ともなり、淫富ともなって、人から指弾されるばかりでなく、みずからをも損うことにな 間としての最少限度の責任である。名誉や名声、地位や財産等というものは、この最少限度 対し、あるいは公共団体や国家に対し、それぞれ独自の義務をもっておる。そしてこの与え 私人として、アデナウアーは自分の人生を、自分に与えられた義務に果して忠実であったか るのである。 の責任を果して後、はじめて期待し得るアクセサリーに過ぎない。そうでないと、それは虚 られた義務を、 相としてその再建に成功した後半世の光輝ある記録よりも、 ナチの暴圧に抗して闘った、前半世の筆紙に尽せない苦闘の思い出や、瓦壊した祖国の首 何とかして果すことが、人間の生活に意義を与えることであるとともに、 一個の公人として、また

客の述懐は、 世をあげて権利の主張に狂奔し、義務の履行を懈怠しがちな今日この頃、この枯淡な老政 われわれ後進の人生行路にとって、不滅の道標というべきであろう。

· - - · - ·

### 四 庶民と歴史

私も去年[昭和四〇年]の正月は喪に服し、謹慎しておりましたが、今年はまず元旦に家

内とともに宮中に参内し、両陛下に年賀の御挨拶をいたしました。

し、七十歳以上の老齢の方に、勲章を差上げることにしたからでしょう。 今年の年賀では、勲章をつけた人が散見されました。一昨年、政府は生存者叙勲を復活

す。今回復活した叙勲には、そういう色彩が薄れて、地方政界、実業界、学界、教育界、 ら今日まで、大臣とか将軍とかいうものが、高い位階勲等にあずかる例が多かったわけで 古来、賞罰を厳正にすることが、政治の要諦であるとされております。ところが、明治か

能界等の功労者も多く受賞の光栄に浴されたことは、結構なことであったと思います。 それでもなお、政界や官界の功労者が多く受章しておられる例が目立ちます。もっと深

く、もっと広く、かくれた功労者を見つけ出す努力が要るのではないかと思います。 最近、私はアイリーン・パウアの『中世に生きた人々』というフランスの本を読みまし

が、その実態に即し、生き生きとえがかれております。由来、歴史というものが、これまで 。そこには、中世の主婦、尼僧、旅行家、農夫、織元、商人等の感情や生活、思想や労働

主として政治家と軍人に象徴されるような選ばれた「指導者」の活躍をえがくことに主眼が

お 彼らが築き上げた秩序や彼らの示した美しき行ないや慈悲の心は、それ自体、尊いもので いうようなものが、これら名もなき人々の生活の中に織りなされていたことでしょう。 の名もない庶民の力であったはずです。指導者の統治に対する讃美と嫌悪、無関心と反抗と かれていたのでありますが、この本はそのことに対する一つの抵抗であると思います。 指導者は何も霞を喰って生きていたわけではなく、その活動と生活を支えたものは、

はならないはずです。 この庶民の感情や生活に照明を与えるのでなければ、本当の歴史、その名に値する歴史に 照明を与えた上でなされなければならないと思います。 叙勲という大切な国事も、そういう意味における本当の歴史の担い手

あったと思います。

に 民主政治はそういう信条に座標をおいての工夫でなければならないものです。それは言うに ければならないものです。門地や閲歴や財産、さらには皮膚の色や、背の高さや頭脳 ました。民主的社会においては、すべての人がそれぞれ正当な市民権を与えられるも なるもの」でなければならないことを、イタリアの先哲マッチーニの言葉を引用して指摘 .捉われず、それぞれの人が、それぞれに理解され、尊重されなくてはならないものです。 かつて、本欄で私は、民主主義というものは、「すべての人を通ずるすべての人のために でな

易く、行なうに難しいものです。

くもろもろの困難を排除しながら、この道を前進しなければなりません。それがすべての 主義を道標として撰択することに決心した以上、最早、後退することができません。辛抱強 その道はけわしく遠いものがあります。しかしわれわれは、敗戦の代償として、この民主

われわれをめぐる家庭、社会、公共団体や国家と自分とのつながりをたぐってみると、何

と多くの問題が民主主義の光に照明された解明を待っていることであろうか。しかし、焦っ

人々の倖せに通ずる道であると決心したからであります。

されません。民主主義というものは、本当はきびしい格律であることに、もう一度思いを新 けです。大局に対する着眼を誤ってはいけないが、小局の処理にまごつくことはいっそう許 てはいけない。興奮してもいけない。序に順ってすべての事を処理してゆかねばならないわ たにしようではありませんか。

自分の判断や行動が、相手の門地や閲歴、地位や財産、身体の美醜等によって曇らされてお 虚栄心の虜になってはいないかを、まず吟味してかかろうではありませんか。市民の名誉と りはしないかを、 まず相手の立場に対する理解と尊敬を頭において、事の処理に当ろうではありませんか。 まず反省してみようではありませんか。自分の意志が、みずからの貪欲や

# 大平正芳君の思い出 田中角榮

田中総理への至高の礼の証しといえます。 の追悼文は、日本人で唯一人、その部の巻頭を飾っている。刎頸の友・ 大統領はじめ外国要人のため「特別寄稿」の部が設けられた。田中総理 有余名の各界名士の追悼文が掲載される一方、章を別にしてカーター米 版の『大平正芳回想録 盟友・田中角榮総理ならではの人間味あふれる追想文。一周忌を前に出 追想編』(回想録刊行会・昭和56年)に所載。二百

経済安定本部公共事業課長の頃である。 ない。昭和二十二年四月の総選挙で初めて衆議院に議席を持った私が彼を知ったのは、 大平正芳君逝いて半歳余り。彼との交友三十年の思い出は更に鮮やかとなり消えることが

立法作業を始めていた時、政府と占領軍との折衝で多忙であった彼、大平正芳を知るように 合開発法の立案作業を始め、のちに議員立法となった電源開発促進法や水資源開発法などの 私が衆議院国土計画委員会の中に地方開発小委員会を設けて、昭和二十五年公布の国土総

なったのである。

閣であった。当時、 との連絡役に、根本龍太郎君と私が党との連絡に当って佐藤官房長官を補佐することにした そのため党内からの風当りが多少強かったので吉田首相の女婿である麻生太賀吉さんが首相 あり、与党である民主自由党勢力は衆議院において一五一議席の少数であり、 昭和二十三年十月に誕生した第二次吉田内閣は片山、 自然に四人組というような格好ができたのである。 佐藤栄作さんは官房長官に起用されていたが、 芦田 連立内閣の後をうけてのも 議席も党籍もなかっ 総選挙管 た。 垂 ので

吉田内部 記者団を招待したパーティーで、 に動いたのである。 ら示されていた候補者に代えて、 立は急務だっ とれず、 戦犯容疑で収容されており、 昭和二十四年一月の総選挙で池田勇人、佐藤栄作の両元首相が当選し議席を得た。 閣 党の政務調査会長に回った。当時は敗戦直後で国家財政は窮乏の極にあり、 の組 たので、 閣に当り、 のちに池田さんが党幹事長となり、 前記 佐藤さんは運輸大臣の候補であったが、 四人は笹山忠夫、 佐藤さんがその二親等以内の親族の故をもって占領軍の0 税の専門家であり前大蔵次官であった池田勇人の蔵相 池田幹事長が 浜口雄彦、 「私が政治家となって第一 私が副幹事長となって明治記念館 岡野清豪 実兄・岸信介さんが当 植田俊吉など占領 に世話になっ 第三次 財 軍 たの 政 Ř が 擁 側

月、第三次吉田内閣が成立するに当って池田さんが大蔵大臣に起用された。池田さんには黒 金泰美、大平正芳、宮沢喜一、稲田耕作という優秀な秘書官が配置されたのである。 は田中角栄である」と挨拶したのは、この時のことを指したものである。昭和二十四年二

事長に転出のため大蔵大臣を辞任するまでの十五、六年間に亙る大蔵省との親しいかかわり 私は右のような縁で大蔵省にもたびたび出かけるようになり、昭和四十年六月に私が党幹

が生まれたわけである。

柄は、この時から一層深くなったのである。二十八年の俗に言う「バカヤロー」解散、 第三次吉田内閣は三年八カ月も続いたのち、昭和二十七年に戦後四回目の総選挙が行 大平君も香川県第二区から初当選した。大平君と私の公私両面における兄弟のような間

となり、職掌柄、 に香川二区の彼の選挙区で街頭演説などに駆り出されたし、のちに池田内閣で彼が官房長官 内閣の留守居役として選挙運動ができなかった時などは、大蔵大臣の職に

で三十年の鳩山ブーム選挙、三十三年の岸内閣での選挙と続くのであるが、私は毎回のよう

あった私が彼の代役のような選挙をした思い出もある。

で大平ブームを捲き起こすようなものではなかった。ある日、夕方のことである。街頭演説 彼の演説は、宗教大学の学者のような格調は高いが地味で真面目なものであり、 街頭演

た」と、一言つぶやいたのである。 う。 吉しかり、吉田さんに曲学阿世の徒などと言われた東大総長・南原繁もまたその一人であろ 用 であろう」。その日の夜遅く宿に帰ってきた彼は「まったく驚いたよ。脇の下から冷汗が出 がて彼は国を代表する国家有為の人材となり、弘法大師にも比肩する四国讃岐の誇りとなる 立ってマイクを握った。 のトラックの上に立っている彼は、ほこりにまみれて真っ黒い顔であった。 諸君、 見給え、 車上に立つわが大平正芳君を―まさに生きながらの銅像ではないか。 「諸君、香川県を代表する人材は数多い。 弘法大師を頂点に三木武 私はその傍に

は今も変わりない。 していた。思い出すたびに大平君は実に素晴らしい子供さんに恵まれ、その倖せを羨む気持 選挙の時は愛嬢・芳子さんと長男・正樹君が、交替で彼の代理として立会演説などをこな

あるから大蔵中心色の人事は避けて、 大臣を三人の中で決めてみなさい」と池田さんに冒頭、 会長は防衛庁の病院に入院中で欠席)「明日の組閣に当ってまず党幹事長、 務調査会長であった私と官房長官の大平君の四人が信濃町の池田邸に呼ばれた。 昭和三十七年、池田 内閣の改造の前夜、前尾繁三郎幹事長、赤城宗徳総務会長、 私が大蔵大臣に、 党の要の幹事長は前尾留任が至当 言われた。 池田総理が大蔵省出身で 外務大臣と大蔵 (赤城 それ に政

外務は大平と自然な形で決まった。 組閣の骨が決まると組閣名簿はスラスラとできあがった

のであるが、翌日になって大風が吹いた。

田中、大平連合内閣ではないか」 案で決定したい」と名簿が示されたところ、 党の副総裁と三役を組閣参謀として総理官邸で会議が始まって、 大野伴睦副総裁から一喝が飛んだ。 すぐ池田総理 「この案は から「この

驚くとともに微笑んだのである。一時間程したら扉が叩かれたので総理大臣室に入っていっ と田中大蔵大臣はそのままであった。大平君がその時、どんな顔をしていたかは今でも思い いながら、黙って池田総理から渡された確定組閣名簿を見たら、前尾幹事長、 たら、大野さんはニヤニヤ笑っていた。原案のどこかに大野副総裁が手を入れたのだ―と思 かき始めていたのである。繊細で緻密な大平君にこんな図太い神経があったのか―と、 寝てしまったのである。私はちょっとムカムカしていたが、そのうち大平君は軽いいびきを 私と大平君の二人は黙って席を立って官房長官室に入り、 内から鍵をかけて椅子を並べて 大平外務大臣

おり、 東京・平河町の自由民主党本部の総務会室で昭和四十三年産米の生産者米価が議論され 議論は沸騰し果てることのない状況の時である。田村元(のちの運輸大臣)、 田村良

出せな

は 農民生活などまったくご存じないから、こんな事態を招くのである。大平政務調査会長は 0) 戻れないんだよ」と私が言った。私の声が幾分大きかったのか笑い声も出て、 引っ張って再び席に戻した。後から考えて言わずもがなのことではあったと思われたが、私 座っていたのであるが、それまで黙々として聞き、時に細かすぎる程の答弁を続けてい のである。福田幹事長の右が米価調査会長の私の席であり、その右に大平政務調査会長が ちに職を辞して退席すべきである」―と発言するにおよんで、議論は最高潮の場 こんな低い米価が議題となるのだ。特に大平政調会長などは大蔵省のエリート官僚であ 平両総務の発言は最も激しく、厳しいものであった。 緊張が緩んだように思えた。 「馬鹿だな。 ツト席を立って総務会室から出ていく姿勢を示したので、私は右手で彼の左腕を強く 党内の議論で腹を立てて席を立つ奴があるか。席を立ったら再びこの席 「わが党が農業に理解が足りない 瞬、 面 を迎 総務会 た彼 から には え

讃岐の貧農の倅である。 士であり、 大平は百姓の生活を知らないと言われたが、あなたたち両君とも父君はわれわれの先輩 しばらく机の一点をじっと見つめていた彼は、 名門の出であり、そして裕福な家庭で育った方々である。それにくらべ私は 四国の田圃は耕して天に至ると言われ、 静かに立って口を開 わが家のいくばくもない田 いた。 両総務は 四 私

業を知らない人と言われることは心外である」―と述べて腰を下ろした。私の初めて聞いた 費生として勉強し、漸くにして大学を終えることを得たのである。このような大平正芳が農 の少ないわが田圃を見回るのが、日課であった。そのような毎日の日課を必ず果たしてか 圃は山の中腹より上にあった。私は少年の頃、夜明けとともに家を出て、 朝の一番の汽車に乗って学校へ通ったのである。家貧しく学資もなく、私は給費生、 山の中腹にある水

腹の底に響く大平君の発言であった。

をじっと見つめられたことを鮮やかに記憶している。「後任は誰にするんだ」とまた一言ポ た。日曜日のことであったと思う。午後三時か四時頃、私ががんセンターの病室に着くと なことを言った時の大平正芳の゛ほんもの゛としての良さをしみじみ感じたのである。 で席を立ったら再びその席には戻れないよと言った君の言葉は僕にも応えたよ」と妙に神妙 ある。後日、何かの折に「あの時の君の発言には重みがあったよ」と言う私に 「ちょっと前に河野一郎君が見舞ってくれて、今帰ったよ」とポツリと一言、言って私の顔 池田総理が築地のがんセンターに入院している時「ちょっときてくれ」と呼出しがあっ この一言で総務会は米価の取扱いを党三役と米価調査会長である私の四人に一任したので 「あんな状態

ツリ。私は池田総理が辞任の決意をしたことを知った。私が病室に入ると入れ違いに満枝夫

ずに佐藤さんに禅譲することがほぼ了解されていたのに、ある行き違いから池田さんが三選 作だ」と一言、 人が席を外された意味が直ぐ呑み込めた。私は池田総理の目を直視しながら「それは佐 理解していたのである。 佐藤さんと激突する羽目になったのであり、その事情は池田総理も私も充分過ぎる 明確に言った。昭和三十九年に行われた自民党総裁選に池田さんは立候補

あった。 に笑って見せた。一年でも二年でも長生きをしてほしいと、私は心の中で叫ぶような気持で を立った。扉の前でもう一度、振り返り「お大事にして下さい」と言う私に池田総理は微か らせます」と言うと共に「このことは大平君にだけは伝えておいて下さい」と一言述べて席 飲み食いも一切禁ずる」と池田総理が言った。私は「わかりました。絶対に守りますし、守 してから「一つ、運動してはならない。二つ、金は絶対使ってはならない。三つ、党内での 池田総理も私の目をじっと見ながら、ただ一言「うん」と言って横になられた。 しばらく

の紀子さんに挨拶して玄関を出た。玄関には珍しく新聞記者の姿は見えなかった。 さんが帰った後のエア・ポケットみたいな時間帯で廊下に人影もなく、満枝夫人とお嬢さん 池田総理と話し合っていた時間はちょうど一時間程であったが、 先刻、 時の人・河野 車に乗っ 一郎

てから私は大きな呼吸を一つした。

いつも使っていた広島県出身の名物お内儀が経営している築地の栄家でだけ会うことにし 言しておいた。党内事情も複雑な時であり、大平君とは必要止むを得ない時だけ池田さんが 私は翌日、佐藤栄作さんに会って右の事情を伝えて、三つの誓いを絶対守ることを強く進

て、努めて接触を避けていた。

スホテルで開かれる前日のことである。溜池の佐藤派事務所から「直ぐくるように」との連 池田総理の辞意表明がなされ、川島副総裁を中心に佐藤、河野、三木会談が大手町のパ

絡を受けて、私は大蔵大臣室を出た。

押してくれ」と言う声に私は卓上の受話器をとって栄家に電話して、そこにいる筈の大平君 えた。「間違いないだろうネ」と一言。「間違う筈はない」と私は答えた。「大平君に念を てくれと言われてね」と言う私に、電話口の声は明確に「変ったことはまったくない」と答 を呼んで貰った。「失礼なことだが佐藤さんが今、君に変ったことはないか電話で念を押し 佐藤さんが一人で待っていた。扉は閉め切られており、佐藤さんの顔が相当硬い表情に見

と言いながら窓際の方へ歩いていったので、私は「失礼した。いずれ」と言って受話器を置 えた。私は佐藤さんに「あなたが直接、電話口に出ますか」と念を押したところ「結構だ」

眠ったのである。

ながら、明日から自分で為さなければならないいくばくかの選挙応援について、考えながら

枕許のスタンドのスイッチを切りながら「彼も少々、心細くなってきたんだなあ」と思

した

こんな素晴らしい一面があったのである。 て「君も僕も信用ないんだからネ」と一言さらりと言って、この件は終った。大平正芳には この日の夕刻であったと思うが、大平君に会って釈明しようとする私を押さえるようにし

ように選挙は上手でないのでネ」とまったく大平流の答えである。私は少々腹が立ったが らもっと真剣に遊説計画も立てなければ駄目だよ」「うむ、俺もそう思ってはいるが、 い調子で言ったら、彼もまた切り口上で「勝つつもりで立候補したのだ」と言う。「それな ことに意義を認めているのか、絶対当選を目指してなのか、改めて聞きたい」と私も少し強 始に際して大平君から「近く全国遊説に出るのでよろしく」と電話があった。 「君の真意は確かめた。僕もいささか君のため微力を尽すよ」と答えて電話を切った。 昭和五十三年、大平君が自民党総裁予備選挙に立候補した時のことである。 予備選挙の開 「立候補する 君

— 21 —

支援を決めた以上、私も正々堂々、大平を支援する」と、甲府の街頭で金丸代議士は勇敢な 君は初めはあまり大平君に好意を寄せていないように受け取られていたのに「田中派が大平 大平総裁候補の地方遊説の第一声は山梨県甲府市である。金丸信代議士の牙城である。同

声に及んだのである。

を言う。北海道五五〇万道民の中には六〇万人の新潟県人がいる。大平歓迎には三千人以上 声にも出さない彼は、よほど嬉しかったに違いない。最終段階の札幌行きの時も少し疲れて からまた電話である。「北海道はお陰様で成功であった。ありがとう」というものであっ は集まるよ」という私の声に答えもなく、プツンと電話が切れた。北海道から帰った大平君 いる風であった。「北海道で僕のために人が集まってくれるかネ」という電話に「今更、何 の真骨頂を見て見習うべき多くのことを学んだ。ありがとう」と言った。喜怒哀楽を表にも その夜、大平君からまた電話があった。「金丸君に心から感謝する。今日は甲府で党人派

知っていたので「外遊日程は余程考えないと外務省に殺されるよ」と時折、私は彼に忠告し あまり気にもしていないように思えた。しかし、 総理大臣になって外遊日程が立て込んでいる。英語の得意な彼のことであるから、外遊は 私は経験上から考えて日程がきついことを

た。

ンベは持参するように」と言う私に「ありがとう」と一言、言って電話は切れたのである。 が今度の外遊日程は感心しないネ。メキシコは海抜二千三百メートルの高地であり、 らまだましなのに―と言ったが、外国訪問は相手国の都合もあり、どうしても無理な日 ある。同じコースでもカナダ―ワシントン―メキシコか、メキシコ―ワシントン―カナダな 総選挙を前にした都内遊説の日の夕刻である。大平総理、 特に彼の最後の外遊となったワシントン―メキシコ―カナダは変更するよう求めたので 出発の日の朝、 「これから出かけてくる」という電話に「愚痴のように 倒れる。私はまったく暗然たる 酸素ボ 程

森 絡を受けた。虫の知らせとも言うものか、私は六月十一日から十三日まで三日間、上京する 田 を見舞うことにし、その晩は久し振りに自宅で一杯飲んで床に就いたのである。 たが、突然の見舞いで新聞ダネを提供することになっては―と思って、翌十二日早朝に病院 予定にしていたのである。私は上越線上りの汽車を変更して飛行便で夕刻、 田君からの電話で容態の急変を告げられて信じ難い気持であった。私は彼の入院先である 一秘書官から「大平が会いたいと言っているので都合をつけて帰京されたい」旨の電話 総選挙中のため新潟にいた私は六月十一日、大平君の愛嬢・芳子さんのお婿さんであ 羽田に帰ってき 翌朝 Ŧi. 時

気持であった

なのか。このことは時が経つほど私の脳裡を去らない。このことは私の生涯を通じて消える のために帰京しておりながら、生あるうちに会い、また語ることのかなわなかったのは何故 虎の門病院に駈けつけたが、すべては終っていた。 お互いは三十年余の交友であり、彼もまた最後に何事かを伝えんと求め、われもまた、そ

ことのないものであろう。今はただ心から亡き友の冥福を祈るのみである。

## 大平正芳氏のこと

# ヘンリー・A・キッシンジャー

のように、大平の回想文と平仄が合っている。 かもその両者の信頼関係は、前号紹介の大平の文章「日米関係」でご覧 た追想文を書かしめた経緯と理由が格調高い文章で紹介されている。し 本には辛辣で手強い相手。そのような人物をしてこのように礼を尽くし 1970年代、西側陣営外交の第一人者として勇名を馳せられ、特に日 同じく『大平正芳回想録』追想編』(同上)に所載。同氏は東西冷戦下の

必要はほとんどなく、多くの場合、以心伝心、暗黙のうちの理解によって意思の疎通が行わ る。国民全体がいわば一つの大きな家族をなしており、その中にあっては明確な意思表示の れている。これらのことを私が理解するまでにはしばらく時間を要した。 国民である。意思決定は個人の意思ではなく相互の尊敬に基づく合意を反映するものであ てきた歴史をそのまま反映している。日本人は非常に繊細でありながら、また団結心も強い 大平正芳氏と私の交友の歴史は、幾つかの重要な意味において私が日本という国と関わっ

国際政治におけるニュアンスの重要さについて彼から教わるところが多かった。言葉ではな 大平氏は日本国民の偉大な指導者であった。同時に米国の良き友人でもあった。とくに、 むしろ言葉で表現されなかった部分にこそ深い友情が存在していることを、痛切に感じ

させてくれたのも大平氏だった。

は、そのすばらしく礼儀正しい物腰のうちに、おのずと伝わってくるのである。この非凡な は毛頭なかったに違いない。しかし、とにかくその日の晩餐会に同席することになった。大 平氏はあまり口はきかれなかった。それでいて、誠意あふれる態度で接しておられること も日本についてこれまで辛辣な発言の無きにしもあらずだった私に、心の内を明かすつもり て大平氏はその渦中にある人物の一人と目されていた。だから彼は、まだ面識もなく、 画だと思った。しかし、折しも日本の政局は佐藤首相の後継者選びで揺れ動いていた。そし 大使館では日本の外相経験者数氏を招待し晩餐会を準備してくれた。私は、なかなかよい企 力にはまことに感銘を受けたものである。 私が大平氏にはじめて会ったのは一九七二年六月である。日本を訪れた私のために、 米国

ていった。大平氏は日本について根気よく私にいろいろなことを教えてくれた。彼は常に、 われわれの付合いは最初は戸惑うようなこともあったが、次第に落着いた友情へと深まっ

に対し、 慎み深 大平氏に対する尊敬の念は、 い 私は素直な友情を抱き、その盟友たることを誇りとするようになった。 態度 の中 -に豊かな才能を秘めていた。 後には敬服へと変っていった。この賢明で篤実温 約束した以上のことを実行するのも常であ 厚なー 人物

で、 て、 0) なって初めて発言した。そしてこの発言を契機に会議 国が集まりエネルギー問題の討議が行われた。 大平氏に対し大きな信頼を寄せるようになった。それから三カ月後、 本の独自性と米国に対する友好関係を損なうことのない政策を打ち出されたのである。 日本が当 協力機関として重要な役割を果すことになったのである。 自国 すなわち国際エネルギー 九七三年 自らは発言を控え、 対米関係を調整するという困難な仕事に取り組んでいた。 大平氏は当時外務大臣をされていた。彼は、 一時直 の面子にこだわったために会議は大荒れに荒れた。 面 十一月、 してい た石油危機への対応と一致するものではないと考え 中東で石油生産が中断された直後、 熱心に他の人々の話に 機関が創設され、 耳を傾けてい 先進工業国 各国が問題の核心とはほど遠い些細なこと 深刻な日本のエネルギー事情 の行詰り状態が打開されることに 蕳 私は国務長官として日 たが、 しかし大平氏は常と変ることな のエネルギー 中東問題への米 Ņ よい ワシントンに先進 よ会議の 問題に関する常設 ていた。 国 の最中に 『の対応 本を そし 訪 私は な で日 日 は あ 問

方、国際的に日本の地位と重要性がますます高まる時期にあって、大平氏は日米両国 大平氏は、現代史上の重要事件とも呼ぶべき、日中関係の正常化に中心的役割を果した。

持つことをよく理解していた。さらに、先進工業国の結束の強化という至難な目標に向って パートナーシップの強化を唱え、不断の努力を続けた。また、その叡知と達見をもって両 相互依存が、そして、人類の未来を確実なものとするためには国際協力が不可欠であること 大きな足跡を残している。先進国と開発途上国とを問わず、 関係の前進に大きく貢献した。彼は経済と外交の両面に精通しており、双方が密接な関係を 国際関係のすべての面にお

に、 大さ、素晴らしさの典型を見出していた。 米国の指導者たちは所属政党、政治的信条の別を問わず、一様に大平氏の中に日本の偉

も明確に認識していた。大平氏は、

自由の大義、平和の大義を推進した旗手であった。

関係者の中には、 る。私の訪日の世話をしてくれた人々が歓迎レセプションを催してくれた。アメリカ政府 大平氏と私が最後に会ったのは、一九七九年私が一私人として日本を訪ねた時のことであ 大平氏にはそのような優柔不断さは微塵もなかった。まったく思いがけなく、 前政権の閣僚を主賓として迎える催しに出席すべきかどうか迷う者もい

人の閣僚を連れて姿を現わすと、彼は、私を招き、われわれは長い時間二人だけでさまざま

— 28 —

同時

平氏は国務に忙しい立場にあることなどまったく見せなかった。 なことを語り合った。彼は、多くの問題について持ち前の賢明な判断を示した。この間、 大

と冗談を言った。彼はにっこり笑うと、頬を私の肩にすり寄せる仕草をした。われわれの間 もないのに私の発言を通訳させて、答を考えるための時間かせぎをしていたことが分った、 る彼を呼びとめると、 数日後、大平氏は、 日米欧委員会において流暢な英語で演説を行った。会場を去ろうとす 私は、大平氏の英語の演説を聞いて、これまでの私との会談では必要

験となっている。私は感謝の念をこめて大平氏の想い出をいつくしむであろう。 私の公的生活を通じて、大平氏との交友はもっとも懐かしい想い出、 もっとも誇り高 い経

#### 香山健一

論。大平の「新権力論」(『硯滴考』1号) との3点セット併読がお勧め 『大平正芳 佐藤誠三郎先生の「大平正芳の政治姿勢」(『硯滴考』3号)と双璧の大平 治哲学へと次第に昇華していく」その過程の多角的分析は鋭く教訓的 とする楕円の哲学だった」として「やがて大平独自の真の保守主義の政 源流は「老子とトマス・アクィナスという東西二つの自然法思想を中心 政治的遺産』(大平財団・平成6年)に所載。 大平政治哲学の

# はじめに――良賈は深く蔵して虚しきが如し――

いう言葉がある。良い商人というものは、品物を店の奥深くにしまって店頭を飾りたてたり しないので、一見、店が空っぽのように見える。それと同様に、大人物ほど知識や才能をひ 政治家大平正芳が晩年よく揮毫した言葉のなかに、「良賈は深く蔵して虚しきが如し」と

けらかしたりしないものだから、なにも持っていない人間のように見えるものだ、という意

味である。

極めて論理的なもので、 家であった大平の言葉、 り、この若い時代からの座右の銘を書いたのであろう。生涯を通じて読書家、求道者、 の心ない合唱を聞き流しながら、大平はみずからに言い聞かせるような気持で静かに墨を磨 きが如し」の後には、 この言葉は、 慎重に言葉を選ぶ合間に発する「アー」や「ウー」という言葉を揶揄するマスメデ 『史記』の「老子伝」のなかにある言葉であるが、 「君子は徳盛んにして容貌は愚かなるが如し」という対句が統い 発言、 日本の政治家の文章にはめずらしい高い格調を帯びたものであっ 文章は、 人間と歴史、自然と文明に対する深い思索に満ちた 「良賈は深く蔵して虚 思想

第になくなり、 "賈」と呼び、行商するものを「商」と呼んで区別していたという。のちに、この区別は次 賈」とは商人の意である。古くは店のなかに商品をストックして売り買いするものを ともに商人の意味に用いられるようになった。

に、 考えることが多かったに違いない。やがて、大平はみずからの人格形成のなかで、 東京商科大学 昭和八年(一九三三年)から十一年(一九三六年)にかけての内外情勢激動 (現一橋大学)に学んだ大平正芳は、 「商」や「賈」の意味について深く の時間

して虚しきが如き」「良賈」となることをごく自然にめざすようになっていったものと思わ

は、 大平正芳の墓碑銘には、 斃れて後已まざりき」という言葉が刻まれている。その理想は、人間の生き方として 「良賈は深く蔵して虚しきが如し、君子は徳盛んにして容貌は愚かなるが如し」であっ 「君は永遠の今に生き、現職総理として死す。 理想を求めて倦ま

た。

うも目立つのであろうか。 あろう。いたずらに店頭のみを飾りたてる政商や大衆迎合型の行商人ばかりが、どうしてこ 大平死して既に十有余年、日本の政界にもなんと「良賈」が少なくなってしまったことで

真上の位置を意味し、 て痛切な戒めを与えることをいう。 る日本の政治家たちへの「頂門の一針」となることであろう。ちなみに、 今、あらためて大平正芳の政治哲学を問いなおすことは、政治哲学を見失って右往左往す その部分に針を立てる鍼治療法があるところから相手の急所をおさえ 「頂門」とは頭の

## 一、大平正芳の「楕円の哲学」

た。その大平哲学を私はかねてより「楕円の哲学」と呼びならわしてきた。 統合した、深く、重厚な人間観であり、世界観であり、歴史哲学であり、政治哲学であっ 何であったのであろうか。それは、 政治家大平正芳が、その人間の内面に深く蔵しつつ、生涯をかけて磨き続けてきた玉とは 大平哲学とも呼ぶことのできる、古今東西の文化遺産を

は、 の和が等しい点を結ぶと楕円になる。戦後日本が生み出した政治家大平正芳の思想と行動 平面上において、一つの中心から等距離の点を結ぶと円になるが、二つの中心からの距離 円の軌道よりも楕円の軌道を描いている場合が多いように思われる。

あろう。 における楕円軌道の二つの中心とは、政治哲学の分野にあっては、東洋の政治哲学の粋であ 過度の単純化のあやまちをおかす危険を承知のうえでいえば、この大平正芳の思想と行動 「治水の原理」と西洋の政治哲学の粋である「保守主義の哲学」であったといってよいで

十三年(一九三八年)正月、新年拝賀式における横浜税務署長としての訓示のなかにおいて 大平自身が、 楕円という言葉を使った最初の演説 記録に残っている限りで― は、

である。

当時、二十八歳の大平税務署長は、署員をまえにつぎのように訓示している。

立場を貫く事が情理にかなった課税のやり方である」。 力万能の課税も、 税務の仕事もそうであって、一方の中心は課税高権であり、他方の中心は納税者である。権 関係に在る場合、はじめて統制はうまく行くのであって、その何れに傾いてもいけない た統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由が緊張した均衡 た関係にある場合、その行政は立派な行政と言える。……支那事変の勃発と共にすべり出 「行政には楕円形のように二つの中心があって、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張 納税者に妥協しがちな課税も共にいけないので、何れにも傾かない中正

対立統合の構造でもなかった。それは、近代合理主義の「Aか非Aか」―肉体と精神、 権利と義務、自由と統制、集団と個人、利己と利他等々と際限なく物事を二つに分割してい が、決して東洋の陰陽道のようなものでもなければ、西洋の弁証法のような単純な正反合 ことができる。それは、 この税務署長訓示のなかで述べられている「楕円の哲学」は、大平哲学の原初形態とみる 神と悪魔、体制と反体制、支配階級と被支配階級、 一見、一元論的思考方法を排した二元論的思考のようにも聞こえる 右翼と左翼、 資本家と労働者

得ないと考える実在の論理を相互律と呼ぶ。Aと非Aの緊張関係や均衡が問題となるのは、 この両者が相互に他を前提としてしか実在することのできないものであり、実は同じものの を論理学上、自同律と呼ぶのに対して、Aと非Aは相互に他を前提することなしには実在し しうるものであり、非AはAを伴ってのみ実在しうるのである。Aと非Aとを区別する思惟 く「二分法」(dychotomy )―の二者択一的思惟の限界を越えようとするものである。 Aと非Aは実在の世界においては、決して別なものではない。Aは非Aを伴ってのみ実在

す。 名にあらず。無は天地の始めに名づけ、有は万物の母に名づく。故に常に無はもってその妙 を観さんと欲し、常に有はもってその徼を観さんと欲す。この両者は同出にして名を異に 『老子』はこのことを、「道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、 善は同時に悪」としてつぎのように論ずる。 同じくこれを玄と謂う。玄のまた玄は、衆妙の門なり」と述べ、続いて「美は同時に 常の

面に過ぎないからである。

て聖人は、 有無相生じ、難易相成り、長短相較べ、高下相傾き、音声相和し、前後相随う。ここをもっ 一天下みな美の美たるを知る。これ悪なり。みな善の善たるを知る。これ不善なり。 無為の事に処り、不言の教えを行う。万物作りて辞せず、生じて有せず、なして

恃まず、功なりて居らず。それただ居らず、ここをもって去らず」

教、神学の原点にも立ち戻ったのである。その結果、若き日の大平が深い思想的影響を受け ともに、『聖書』やトマス・アクィナスの『神学大全』などを通じて、西洋の古典哲学、宗 どまるものではない。大平は近代合理主義の限界を越えるために、東洋の古典哲学に戻ると なったように思われる。これについてはのちに再び立ち戻ることとしたい。 た内村鑑三などと同様に、大平哲学は東西文化の遺産の壮大な統合という姿勢を持つことと しかし、大平正芳の楕円の哲学は、老荘哲学から大きな影響を受けてはいるが、それにと

出す楕円軌道は次第に円熟の度を深めていった。 村に生まれ、ベネチア・サミットの直前、総選挙のさなかに現役の総理大臣のまま急逝され いた。大平正芳の波瀾に満ちた七十年の生涯のなかで、東西の政治哲学の調和と融合が描き る昭和五十五年(一九八○年) 六月十二日まで、激動の明治、 大平正芳は、日露戦争直後の明治四十三年(一九一○年)三月十二日に香川県三豊郡和田 大正、 昭和の時代を生き抜

日本を円(circle)に譬えられたことがあるが、もし氏が大平正芳の政治哲学を観察された 作家の吉田健一氏は、 かつて『まろやかな日本』 (原題─Japan Is A Circle) のなかで、

であろう。 ならば、円形ではなく『楕円形の日本』(Japan Is An Oval or An Ellipse)と評されたこと

れだし、 てしまう。氾濫と築堤の繰り返しである。 られれば逆に溢れだそうとし、堤防が高くなればなるほど水嵩も増してやがて堤防は決壊し という方法で、高い堤防を築いて洪水をふさぎとめるというものであった。水はふさぎとめ に取り組むが、 し、洪水は天まで達したとさえいわれている。禹の父親は、時の帝堯に命ぜられて治水事業 なすものは、治山治水であった。当時、黄河をはじめとする中国大陸の大河はしばしば氾濫 ある。夏王朝の始祖禹にまつわる故事につぎのようなものがある。古代中国の治世の基本を 「治水の原理」とは、民心は水の如きものであって、強制的にせき止めようと思えばあふ 自然に道をつければ流れていくものだという東洋の政治哲学の基本をなす考え方で 九年経っても成功せず、やがて処刑されたという。その治水の方法は 湮

するのではなく、適当な水路を作って水の流れたい方向へ自然に誘導するのである。 わりに「疏」または「導」といわれる方法を採用する。その方法は、水をふさぎとめようと 父のこのやり方では治水に失敗することを見抜いた禹は、「凐」という方法を止めて、

水」という言葉は、こうした故事に由来している。

ある。こうして古代東洋の政治哲学にあっては、「疏」や「導」と呼ばれるような「治水の 原理」が、政治の理想とされるようになっていったのである。 のも水の流れと同様である。人間の心というものも強権でふさぎとめようとすれば激して逆 治水だけではなく、政治もまた同じ原理に基づくものと禹は考えた。民心の流れというも 、民意を尊重してその進みたい方向に水路を作れば自然に、自発的に流れていくもので

片手で地面を叩きながら「日が昇れば仕事をし、日が沈めば眠る/井戸を掘って水を飲み/ 畑を作って飯を食う/おかみのお世話になるものか」と口ずさんでいたという。 成果を知るためにおしのびで町に出てみたところ、ひとりの老人が片手で腹づつみを打ち、 の理想をよく示している。この故事によれば、古代の名君と呼ばれた帝堯が、治世五十年の 鼓腹撃攘」という故事も、政治を感じさせない政治こそ政治の理想という東洋政治哲学

『老子』は「上善如水」といい、最高の善は水のごときものであると述べている。

大平正芳にとって、この政治哲学は戦前、 若い頃から東洋の古典に親しみ、『老子』『史記』『十八史略』などを愛読しておられた 戦中、戦後の歴史の激動の体験を通じて、次第に

深みを増していったといってよいであろう。

この若い時期の在外経験を通じて、その脳裏に刻まれた日本の大陸経営と中

連帯構想という政策構想にも通ずることとなる。

交正常化交渉の際の、

大平の毅然たる政治姿勢や日米関係、

日中関係を基軸にした環太平

やがてのちの

百

中

玉

農村社

現実との矛盾

についての自覚は、

政治哲学のレベルのみにとどまらず、

当時、 張家口 価 1) 年半の滞在は、 政の一区画を形成し、中央銀行券も独自のものが流通し、治安はもとより、 かで書いておられるように、 について極めて深い認識を持つに至ったものと思われる。大平自身が、 興亜院在勤経験と大陸経験を通じて、大平は中国の経済社会の実情や歴史風土、 政治哲学への認識を一層深めるものとなった。 機会を与えてくれたものだったといえよう。 和 為替などについても、一応独立した運営が行われていた。それだけに、 大平と同期の大蔵省昭和十一年入省組の多くが興亜院に派遣されたが、この二年 十 への赴任と、その後、 四年(一九三九年)六月から翌年十月までの興亜院蒙彊連絡部経済課勤務 素朴ながら国家の「原型」というようなものを勉強するには、 昭和十七年にかけての 「内蒙古は、 満洲、 張家口赴任当時、 北支、 再三の中国大陸出張は、 中支、南支と同様、 大平は二十九歳であっ 『私の履歴書』 財政、 大平正芳の 張 日本の占領地 家口 またとないよ 文物、 での 経済、 のため のな 東洋 約 思想 蕳 た。 物

## 二、徳治主義と『為政三部書』

られる)のなかの「廟堂忠告」の言葉である。 でもなく、この言葉は元の張養浩の名著『三事忠告』(安岡正篤訳『為政三部書』として知 晩年の大平正芳がよく書かれた色紙の言葉に、 「任怨 分謗」という言葉がある。

と書いている。 るわけでもなかったが、そうした目的のない雑談に大平は大いに解放されていたのである」 たこともあって、大平は朝の散歩がてらに気軽に安岡のところに寄っていた。別段用事があ よく知られている。神渡良平著『安岡正篤の世界』は、「大平の自宅が安岡の自宅に近かっ 政界一の読書家といわれた大平の愛読書のひとつが、この『為政三部書』であったことは

記』には、昭和三十四年三月某日「大平正芳氏飄然先生を訪問、当時大平氏の自宅は先生の のことではなく、実は学生時代からのことであった。安岡の高弟林義之氏の『安岡先生動情 たことはいまさらいうまでもない。しかし、大平が安岡の著書に親しんだのは、宏池会以後 「高光の樹に休息し、以て宏池に臨む」―にちなんで、池田派に「宏池会」という名をつけ また牧野伸顕、 吉田茂、池田勇人氏らが師事した安岡正篤氏が、中国後漢の馬融 の故事

こと、 民を重んずること、「遠慮」―先々に心すること、「調燮」―調え和らげること、 白山下の住居の近くにあったので、それを理由にしてとのこと、用談というほどのことはな 怨みを受けて恐れぬこと、 学生時代より先生の書物は殆ど読んでいることなどを話して帰る」と記録されている。 廟堂忠告」は、 「獻納」―忠言を奉ること、「退休」―いつやめるか、の十項目の忠告からなってい 「修身」―身を修めること、「用賢」―賢者を用いること、 「分謗」―同僚の謗を我も分かつこと、「応変」― 「重民」— 一変に応ずる 「任怨」

どの苛酷なものであった。昭和五十五年(一九八〇年)五月十六日、自民党反主流派の欠席 厳しく鞭打ち続けておられたことであろう。 ミットを目前にした総選挙のさなかに、病床に伏しながら大平は、「任怨 分謗」と自らに 精神的緊張は人間の耐えうる限界を超えていたものといってよいであろう。ベネチア 議院選挙告示日の五月三十日、 による大平内閣不信任案の可決から、内閣総辞職、衆院解散、衆参同日選挙決定、そして参 ように、大平正芳の人生の最後の時は、 『大平正芳 人と思想』の第四十章「召命」、第四十一章「永遠の今」に記述されている 街頭演説で倒れられ、六月十二日に召命されるまでの一 「退休」―いつやめるかを考えるいとますらないほ 月の

とを意味する。 れる。「長夜」とは、仏語で凡夫が煩悩のため悟ることができず、迷いから逃れられないこ うした精神的緊張の極限状況のなかの束の間の静けさのなかにおいてであったものと推察さ 病室を訪れた旧友に、 「得病更知旧友情 明常思長夜之愁」という漢詩を書かれたのもこ

研究グループ の歴史では前例のない懇親会となった。総理も志げ子夫人や森田一秘書官夫妻を伴って出席 した家族づれの集いにしたいという総理と座長、委員たちの考えに従って官邸や政策研究会 大切さを提言する研究会の最終報告に相応しく、委員だけの会合ではなく、和気あいあいと ら、総理官邸中庭に面した広間で簡単な懇親会が開かれたのである。この懇親会は、 この最終報告書の提出に引続き、いわば同研究会の打ち上げのような形で、午後五時半か 後五時には座長から総理に「家庭基盤充実のための提言」と題された報告書が提出された。 とであった。この日の午後四時半から、大平総理を囲む政策研究会のひとつ、家庭基盤充実 後にお会いしたのは、 『大平志げ子夫人を偲ぶ』のなかにも書き記しておいたことであるが、私が大平総理と最 (座長・伊藤善市東京女子大学教授)の最終会議が官邸会議室で開催され、午 衆参同日選挙のための街頭演説で倒れられる前日の五月二十九日のこ 家庭

されたが、この席でも総理は他人の悪口を一言も口にはされず、

「忙中閑あり」とこの家族

の張養浩の『為政三部書』との出会いをめぐる話題が一瞬頭をよぎった。 問題をめぐって瀬田の私邸で総理におめにかかった際の、 団欒のひとときを楽しんでおられるような風情でさえあった。私は前年の夏、 内蒙古張家口滞在の頃の昔話 般消費税

は、 池田内閣の官房長官としての、「寛容と忍耐」という内閣のキャッチフレーズから 分謗」に至るまで、政治家としての大平正芳の一生を貫いている政治哲学のひとつの中心 東洋の政治哲学であり、「治水の原理」であり、徳治主義であった。 「任怨

## 三、トーニーの『獲得社会』とトマス・アクィナスの『神学大全』

生門下の大泉行雄教授が高松に赴任してこられ、商業学やオイケンの経済学を講じて、 になる。 に、 にとってもかけがえのない重要文化財であった。政策論の面からみても、 の人気を集めていた。大平自身、 昭和三年、大平正芳が十八歳の年に高松高等商業学校に入学した春、一橋の上田貞次郎先 オイケンの経済学との出会いが、やがて大平の東京商科大学入学へも連なっていくこと のちに大平自身が回想しておられるように、一橋大学は大平の思想形成、 『私の履歴書』のなかでこのことに触れておられるよう このときの中山伊 人間 学生 形成

て池田内閣時代の所得倍増論へと連なっていったことはよく知られている通りである 知郎助教授 −恩師シュンペーターの流れを汲む新進気鋭の純粋経済学者─との出会いがやが

もが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚 ころ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクィナスの研究その他のお仕事 にした背景には、そういういきさつもあったのである。 えるようになった。二年になってからの本ゼミナールを、上田辰之助先生にお願いすること の法律思想史など、手当たり次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれ は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生 藤弘教授の下で、「自然と人間の交互作用」をテーマに勉強した。……必修課目のほか、 ておられる。「一年のときのプロゼミナールでは、経済地理と商品学を講じておられた故佐 上田先生は、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のと 『私の履歴書』 のなかで、大平は東京商科大学時代のことについて、つぎのように回想し 私

会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トーニーの英文自体の言語社会学的 ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トーニーの『獲得社 その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。

な解明を教わった」

ない重要な文献である。 うものであった。この論文は、大平の政治哲学の形成過程を理解するうえで欠くことのでき 昭和十一年(一九三六年)の大平正芳の卒業論文の論題は、 「職分社会と同業組合」とい

学のふるさと」と呼ぶこともできる興味深い内容のものであった。(『) 氏が指摘されているように、この大平正芳二十六歳の春に執筆された卒業論文は、「大平哲 『大平正芳回想録』(追想編)に寄稿された一文のなかで、当時の一橋大学学長宮沢健

職分社会論-の学説の時代的意義」、「第二編 アメリカの同業組合論―(イ)同業組合の概念規定、 いて、「第一編トーニー(原文ではトーネーであるが、トーニーに表記統一、以下同様)の この論文は、全文三百七十頁からなるもので、「小序」、「本稿の構成と参考文献」に続 ―(イ)権利と職分、(ロ)獲得社会論、 (ハ)職分社会論、 (ニ) トーニー

業組合のアメリカ産業機構に占める地位」という内容で論旨が展開されている。 ロ)同業組合の史的発展、 (ハ)同業組合の組織、  $\equiv$ 同業組合の内部行政 (ホ) 同

この論文が、 前述の 『私の履歴書』 にもあるように、 上田辰之助ゼミナールにおけるR

礎としながら、その時代的意義を考究しようとしたものであることは明らかである。 ・トーニーの『獲得社会』(R.H.Tawney:The Acquisitive Society,1921)の原書講読を基

光に照らして分析批判し其諸弊悪を暴露し併せて来るべき社会は如何なる嚮導理念を支柱と 往くべき処を行きつくし、今や新たなる転回を余儀なくせしめられつつある。思想の対立葛 本主義社会の退廃現象は覆ふべくもなく私共の眼前に露呈されている。所謂近代精神はその らゆる障壁を踏み越え守るべき限界を無視して発展し分裂したる資本主義社会を社会職分の 個人絶対乃至は権利本位の社会に推移して行ったかの経路を描写している。彼はかくしてあ かを明らかにし、その廃墟に芽ばえた資本主義社会がその本来の成立条件を忘却して如何に 経済史的蘊蓄を傾けて、中世的協同社会が如何なる必要により如何なる過程を経て崩壊せし 書物はトーニーの『獲得社会』であった。そこにはトーニーが彼の卓越せる着想と豊富なる ている。「上田辰之助先生の研究室の門が私に開かれてから最初に御指導をうけつつ読んだ て組立てらるべきかに対し示唆を与えている。 小序のなかで、大平正芳はつぎのようにこの論文の意図するところを明らかにしようとし 分観的機械論と権利本位思想の所産たる自由競争も階級闘争も共に社会を混乱に陥れ、資

藤、そこから生ずる社会の混乱紛糾は人々を駆って不安と混乱の巷に追ひやりつつある。こ

訓練を受けた。」 経済史的に或いは社会史的に考察せんとする希望と欲求を抱き且つそれを考えるについての と辛辣なる皮肉とは私を魅惑してしまった。私は彼に刺激されて「全体と部分との関係 繙いたのである。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の流麗なる行文 こに於いてこの対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を越えた協調が要望される は歴史の必然の歩みでなければならない。 かかる客観的情勢に囲繞されて私はトーニーを

なく、それと対蹠的立場に立つ権利本位の社会の諸々の弊害を歴史的に闡明し且之を暴露 ついては遂に学びとる事が出来なかった」からである。 協同体社会の目的は何かその身分的構成はどうか或いは又それと国家との関係はどうか等に んとするが如きものとうけとれたのである。従って、私は彼の所論を通じてその背景をなす た。なぜなら、トーニーの著作は、 だが、大平はトーニーから多くのものを学びつつも、 「新たに職分社会の構成を提示すると言うべきものでは それに満足することはできなかっ

を論じた欧州中世の経済社会に移行する。 『古代文化と基督教精神との明快にして透徹せる折衷者』、 トーニーの 『獲得社会』の研究を媒介として、大平の研究関心はトーニーがその崩壊過程 当時、 上田辰之助教授は、 トマス・アクィナスの政治経済 中 世の輝け る聖者

学説を中心として」、「欧州中世経済学説史」を講述していた。こうして、大平は中世最大 近代産業社会を超える視点を把握し、他方で西欧のキリスト教的世界観の本質的理解に迫る の思想家といわれるトマス・アクィナスと出会い、トマス・アクィナス研究を通じて一方で

こととなるのである。

的論的秩序、 経済思想の根幹をなせる社会職分の原則が、その背景をなせる協同体の目的並びに構想との みられ憧憬される所謂「中世紀的協同体への復帰思想」の台頭せる意味もよみとる事が出来 関連において理解されかけたのである。そして又トマスに於ける社会の重要なる属性たる目 つれて、トマスの大なる体系が次第に明瞭なる姿を以て脳裏に描かれて来た。殊にその政治 たのである。かかる好条件に恵まれて上田辰之助先生のトマスに関する諸々の文献を繙くに で、トマスの思想は異常なる興味と言わんよりも教養上の切実なる要求として私に迫って来 も或機縁からキリスト教に親しむようになり、それに関する各種の文献を研究していたの マスの深遠なる思想に接する機会を他の学生の誰よりも多く与えられた。偶々私個人として 大平はこの間の事情を先の論文のなかでつぎのように書いている。「かくて幸いに私はト 権利本位思想によって分裂し個人的利己主義によって腐敗せる現時の社会に於いて、 自発的義務的職分意識、其結果として顕現される協調と平和等の諸々の特長

済学説の現代的意義が逆にトーニーの労作を通じて把握されるものと信ずるに至った」 によって、歴史的且立体的に捕捉されるようになった。 るようになった。かくして私が疑問としていたトーニーの所論の背景が、トマスを学ぶこと 他面、トマスの政治学説ならびに経

役立つものと思われる。 の二人の著作が大平正芳の思想形成過程において与えた影響を正確に測定するうえで多少は ここでトーニー並びにトマス・アクィナスについて、若干の解説を加えておくことは、

卿らと同じく、優れたアングロ・インディアンズの家系に生まれたわけである。 まり、彼はベヴァリッジ計画として知られる社会保障制度の創設者、経済学者ベヴァリッジ に生まれた。父は当時、インド州立大学学長の地位にあったC・H・トーニーであった。つ リチャード・ヘンリー・トーニー(Richard Henry Tawney)は、一八八〇年カルカッタ

トーニーは、こうした大英帝国の衰退過程に極めて敏感であった。一八八四年には、 強め、アフリカの南端はボーア戦争に向かって対立を激化しつつあった。植民地生まれ 去ろうとしていた。インドの民族運動は、国民会議派を中心に反英・反植民地主義の性格を まな歪みが顕在化してきた時期であり、ヴィクトリア時代の進歩への楽観主義は完全に 一八八〇年代といえば、植民地帝国英国の内部においてもようやく近代産業社会のさまざ 英国に 消え

フェビアン協会が生まれている。

代の貧困の由来を探究したトインビーの『産業革命史』やロンドンの労働者生活の実態調 住むようになる。 ら、産業革命後に「世界の工場」となった大英帝国の繁栄の蔭に拡がる新しい近代的貧困の をまとめたブースの『ロンドンの民衆の生活と労働』(全十七巻)などの影響を受けなが 社会科学的解明と貧困を解決するための社会活動に参加する。ロンドンのセトゥルメント 一九〇三年にはベヴァリッジが副主事として赴任し、彼の同級生であったトーニーもここに 「トインビー・ホール」には、ベイリオル・カレッジの出身者が多かったようであるが、 ラグビー校からオクスフォード・ベイリオル・カレッジに進学したトーニーは、やがて近

ち戦後社会の人心をとらえたといわれる社会評論『獲得社会』を発表することとなるので における農業問題』を発表したのち、第一次世界大戦に従軍して重傷を負い、復員したの 『ジェントリーの勃興』(一九四一年)などの諸著作を相次いで発表する。特に、『宗教と グラスゴー大学、母校オクスフォード大学などに教鞭をとり、その間、処女作『十六世紀 (Religion and the Rise of Capitalism ―一九二六年)、『平等』(一九二九年)そして その後、トーニーは、『英国労働運動史』(一九二五年)、『宗教と資本主義の興

精神』 興味深い 政策を身をもって体験してきたトーニーのこうした中国社会調査結果をまとめたものとして さらにその翌年には国際連盟の委嘱を受けて、 平洋問題調査会の委託を受けて、広範囲にわたる満洲、 担当教授に就任、 資本主義の興隆』 九四二年に刊行された『中国の土地と労働』は、 と比較して論じられることの多い著作である。一九三一年には、 就任演説の演題は「産業問題としての貧困」であった。一九二九年には太 は、 マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主 再度中国の教育制度の視察を実施してい カルカッタに生まれ、大英帝国の植民地 中国問題の調査報告をとりまとめ、 ロンドン大学経済 義 史

歳 みると、主要な出来事だけを見ても、 大戦と第二次世界大戦にはさまれた戦間期の激動の時代であった。ちなみに、年表を繰って あった。大平正芳の人生の十代終りから二十代初めにかけての時期は、 る英国の経済史学者トーニーの諸著作が、最も新鮮な内外の関心を引きつけていた時期でも 一九三六年)にかけてであったので、矛盾と退廃を見せ始めた近代産業社会の将来に 大平が東京商科大学に学んだのは、 以下括弧内はその年の大平の年齢) 先述のように昭和八年(一九三三年)から 昭和四年(一九二九年)— 昭和五年 (一九三〇年) 世界大恐慌 昭和恐慌 文字通り第一次世 (大平、 (二十歳)、 昭 和 + 関

事件(二十二歳)、昭和八年(一九三三年)―ヒトラー独政権を掌握、日本、国際連盟脱退 昭和六年(一九三一年)―満州事変勃発(二十一歳)、昭和七年(一九三二年)―五 (二十三歳)、昭和十一年(一九三六年)―二・二六事件、スペイン内戦(二十六歳) • 五

定極まる時代であった。 和十二年(一九三七年)―蘆溝橋事件、日独伊防共協定調印(二十七歳)というような不安

る。 皮肉は私を魅惑してしまった」と書いて、その著作から受けた強い刺激を率直に述べてい ある。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の流麗なる行文と辛辣なる 大平はその卒業論文のなかで、「かかる客観情勢に囲繞されて私はトーニーを繙いたので

に明確な規定を与えられた社会体制ではないが、その内容は近代産業社会の在り方 トーニーが『獲得社会』(The Acquisitive Society)と呼んだものは、必ずしも歴史的 倫理から社会組織、生活様式にいたるまで―の根幹に関わる批判であった。表題の ーその

戦後の訳書では、 Acquisitive は、 であるが、著書の内容からすれば『利欲社会』とでも訳した方がより原意に近いであろう。 「利欲的な、取得的な、修得的な、獲得的な」などという意味を持つ言葉 『強欲な社会』という訳語も用いられているが、この表現には逆に価値判

断や感情が入り過ぎているように思う。

トーニーはのちに『宗教と資本主義の興隆』の一九三七年版の序文や、

同年に書かれ

する。ここからトーニーは近代産業社会のこうした矛盾の解決を、 駆使される人間は二つの層に分離する。そして財産所有者と労働者との分離と対立が進行 がかえって人間を手段として用いている。 近代産業社会ではこの関係が逆転して、財産は人間の創造的活動から遊離し、遊離した財産 う機能を持つべきものであり、人間の創造的活動に対するひとつの手段であるべきなのに、 業社会の性格を次のように論じている。 「キリスト教と社会秩序とに関する覚書」などのなかで、彼が『利欲社会』と呼んだ近 (Functional Society) — 大平論文では「職分社会」―に求めようとするのである。 財産とはもともと人間の社会的目的に奉仕するとい ここでは財産はその本来の機能を失い、 彼のいう「職能 ħ

無関係に生じるものとの区別があることに気づくであろう。 根本的な反省を行えば、 社会はprofessionalism と呼ぶことのできるような体制を持つこととなろう。 かの専門的職業団体を作り、 トーニーによれば、 「職能社会」においては人間はその社会的職能を果たすために、 財産には人間の創造的活動によって生じるものと、 めいめいは自分の職能を誇りと責任を以て遂行する。 前者は私有さるべきものである 人間 財産に対 の活動とは その 何ら

である社会そのものに、具体的には社会を代表し、構成するところの公的な団体に帰属すべ が、後者はそうであってはならない。私有さるべきではない財産は、社会的な人間活動の場

ものを置いていた。『宗教と資本主義の興隆』のなかで、トーニーは次のように言う。 して中世キリスト教会の理想であり、近代初頭のヒューマニスト、改革者たちが求めていた トーニーはこのように近代産業社会を超える改革の方途を模索しながら、その根底に一貫

んのために、車はまわるのか、という疑問は相変わらず解かれていない」。近代社会におけ社会的目的にしっかりとつながれて使われれば、それは水車を回し、粉も挽こう。だが、な るこうした価値の喪失と主客の転倒について、見直されなければならないのは中世における ……しかし経済的欲望というものは、下僕としては役に立つが、主人となれば悪いものだ。 のすばらしい成果をかえりみるときに、心に一陣の涼風を覚えないものはまずあるまい。 「十七世紀の後半から物質文明が姿を変えつつあった。実践的な精力と技術的な熟練のあ 経済、社会の関係であり、中世思想であるとトーニーは考えるのである。

つつあった近代社会の諸矛盾に注目し、中世の宗教と経済の関係に深い関心を寄せながら 大平は、このトーニーの『獲得社会』の原書講読を通じて、英国産業社会の内部に進行し

に決定的な深みと重厚さを与えることとなるのである。 クィナスとの出会いこそが、大平の西欧理解、キリスト教理解、 やがてトマス・アクィナスの研究に本格的に取り組むこととなる。そしてこのトマス・ア ことを鋭く見抜くのである。大平はトーニーの立論の背景にある中世の経済社会を尋ね も、トーニーの「職分社会」や「同業組合」論だけでは、近代を超える解決策にはならない 近代産業社会に対する理解

Gentiles)という二つの『スムマ』は、中世のカトリシズムを鼓吹し、ダンテの『神曲』の 学の最も偉大な代表者であり、中世における最も建設的かつ体系的な思想家である。 なかにその最高の芸術的結晶を見出したといわれているものである。トマス・アクィナスは 歴史的な著作である『神学大全』(Summa Theologiae)と『護教大全』(Summa Contra 『神学大全』のなかで、自然法について次のように述べている。 よく知られているように、トマス・アクィナス(S. Thomae Aquinatis) は中世 欧 彼の 州 哲

な導き……これをわれわれは永久法と呼ぶのである」「神の摂理に服する万物は、 によって支配されるということは、明らかである。かかる、神にあっての、被造物の合理的 「世界が神意によって支配されるものと想定するならば、 ……宇宙の全団体が神的な理性 永久法に

そこで、自然法が理性的な被造物における、永久法への参与にほかならないということは明 は言う、たれか善きことをわれらに見するものあらんやと」と付け加え、そしてそれに答え げよ」と誦したとき、彼はあたかも正義の供物は何かと問われているかの如く、「多くの人 理そのものへの参与者とされる。そこで彼等は永久の理性そのものの分け前に与かり、それ らかである。 」 であり、それは自然法である―が、神の光の、われわれに対する刻印にほかならぬ如くに。 四篇第六節)。あたかも、 て、「エホバよ、願わくは聖顔の光をわれらの上に昇らせ賜え」と述べたのである(詩篇第 における、永久法への参与が、自然法と呼ばれる。かくて、ダヴィデ王が「正義の供物を捧 により、適当な行為や目的に向かう自然の傾向を得ることになる。かかる、理性的な被造物 に服する。すなわち、彼等は自己の行為や他者の行為を統御することにおいて、彼等自身摂 向を永久法の刻印から得る範囲で、或る程度永久法に参与するということは明らかである」 よって規制され測定されるのであるから、万物が、それぞれに固有の行動や目的に向かう傾 理性的な被造物は、他のすべての物と異なり、きわめて特殊な仕方で神の 自然の理性の光―それによってわれわれは善と悪とを識別するの

大平のトマス・アクィナスとの出会いは、大平の思想形成にとって極めて意味深いもので

ともに、

あった。

興奮を感じながら、トマス・アクィナスの世界、 意味づける貴重な機会を与えることとなったからである。大平が身震いを覚えるような知的 歴史にのめり込んでいった状況が眼に浮かぶようである。 第一にそれは大平の若き日のキリスト教との出会いの宗教体験を自己の内面から再考し、 西欧中世の宗教と生活が一体であった時代

大平は『私の履歴書』のなかで、キリスト教との出会いをこう書いている。

工学博士佐藤定吉先生が来高し、講演を行

われ

演題

私が高商に入学して間もなく、

青年会館における全国大会にも出席するほど夢中になってしまった。 たものか佐藤先生のお話に感動し、 に専念されていた。キリスト教は、 はたしか「科学と宗教」であったかと思う。佐藤博士は東北大学の教授をやめられてから、 「イエスの僕会」という学生団体を全国的に結成して、科学を通してみたキリスト教の伝道 その夏は浅間山麓の研修会に参加したり、秋には青山 私にとって全く無縁の世界であった。ところが、どうし そればか りか、 同 法と

かし、 佐藤先生の所説は、 われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立つ た

しばしば東京や高松の街頭に立って、信仰の告白をすることも辞さないようになっ

キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教 のためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後 が、その神がなぜ「愛」であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そ

への呼び水的な役割を果たしたものだった。

教会以外には、特定の教会と関係をもつことなく、内村鑑三先生をはじめとして、その門下 き、直接教えを受けた。 大学に進学してからのことであるが、自由ケ丘のお宅の「聖書研究会」に参加させていただ の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里等の諸先生の著作に親しんだ。矢内原忠雄先生には後日、 私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ。もっとも、洗礼を受けた観音寺の

学友梅野典平君と一緒に出向いて聴講し、先生心づくしの昼食をいただいたりしたものであ また、そのころ東松原のご自宅で、聖書の講義をされていた賀川豊彦先生のところにも、

の結びの部分でこう書いている。「聖トマスが今日に於いても尚顧みられ尊重される所以は ス・アクィナスとの出会いは運命的なもののようにさえ思える。大平はその卒業論文の小序 このような宗教体験、 社会運動体験を経てきた大平にとって、トーニーを通じての

と考える。 だけではなく、 ものである為であろうと信ずる。かくてこそ真に古典の名に値する古典たる資格があるもの 彼の学説が極めて秀逸であり今日に於ける問題に対する貴重なる示唆を含蓄していると言う 彼の学説乃至はそれを通じて顕現される、彼の人格の教育的価値が比類なき

伴った自由主義経済への信念と結びついていくこととなる。同時に、この中世の自然法の深 治哲学へと次第に昇華していくことになるのである。 い認識こそが、先に述べた東洋の古典哲学と融合して、やがて大平独自の真の保守主義の政 り得ない―を真に深く認識することとなり、それはやがて確固たる市場経済、 ム・スミスの「神の見えざる手」の意味―それは単に「利欲」のみを目的とするものではあ た。ひとつにはそれを通じて、大平は経済学における自然法思想の発展ともいうべきアダ 社会道徳を深く学ぶこととなった。それは大平にとって二つの重要な意味を持つこととなっ 第二に、トマス・アクィナスとの出会いによって、大平は中世の自然法思想、 経済道 中世の経済 徳を

係について深い認識を得るようになるが、この中世経済社会の認識は近代産業社会の限界や ようになり、そこにおける宗教と社会の結びつき、個人と国家の結びつき、部分と全体の関 第三に、トマス・アクィナスとの出会いによって、大平は中世の経済社会を深く理解する

矛盾を超える方向を模索するうえで、のちに大平にとって貴重な思想的財産となるのであ

る。

## 四、人間的連帯の回復と田園都市国家の建設

和四十六年に合わせてみることとしよう。 を飛ばして、大平の政治哲学を考察するレンズの焦点を一挙に卒業論文から三十五年後の昭 タイムトンネルを通過するかのように、大平の時系列的な思想形成過程の考察の途中経過

裁公選に立候補しようと決意した大平は、九月の宏池会国会議員研修会において、「日本の 新世紀の開幕 この年の四月、前尾繁三郎会長のあとを継いで、宏池会の第三代会長に就任して自民党総 潮の流れを変えよう」という歴史的な政策提言を行った。

その冒頭で、大平は次のようにその時代認識を述べている。

豊かさを求めて努力してきたが、手にした豊かさの中には必ずしも真の幸福と生きがいは発 見されていない。ためらうことなく経済の成長軌道を力走してきたが、まさにその成長の速 わが国は、 いまや戦後政治の総決算ともいうべき転機を迎えている。これまでひたすら

たが、 さの故に、 まさにその進出の激しさの故に、外国の嫉視と抵抗を受けるようになった。 再び安定を指向せざるを得なくなった。なりふりかまわず経済の海外進出を試 : 19

それは、 ればならない。 はこれをまず、「人間的連帯の回復」に求めようとする。「人間的連帯の回復」とは何 うな響きがある。この近代産業社会のパラドックスを超える処方箋はどこにあるのか。 発展がもたらしたパラドックスを論じた『獲得社会』の論調とどこかで深く共鳴してい この経済成長のパラドックスについての叙述は、 大平によれば、 近代産業社会が見失った人間的価値の再発見であり、 トーニーが英国における近代産業社 再確立でなけ

提起したのである。 めつつ、この「人間的 大平は、昭和三十年代から四十年代半ばまでの戦後経済成長期を終えた直後の時 連帯の回復」という一見抽象的に見える課題を真正面から次のように 期を見定

のことではないが、 患者、その他 されつつある。 戦争と欠乏から解放された国民は、 人間関係一般に、 経営と労働の間だけでなく、老人と若者、上司と部下、 わが国においては、 ある種の断絶と相克が生まれつつある。 戦争や欠乏によって支えられてきた秩序からも 敗戦による価値観の転換に加えて、 これはわが国 教師と学生、 経済の高度成長 医 E 特 師 解 放

に伴い、 である。これらのことはすべて国民的連帯感の弱化に起因するものであり、国家存立の基礎 をおこしている例も少なくない。また貧困者、老齢者、病弱者が繁栄の陰に取り残されがち 間関係における動揺の振幅もまた大きいものがある。産業設備や公共施設が地域住民と摩擦 経済構造の変化とりわけ核家族化の速度と規模が、特に激しかった。それだけに人

われわれはこのような事態を最も憂慮するものである。

を掘り崩すものとなる。

くか。それは政治の最大の課題であり、教育の基本的任務であらねばならぬ。……また、 平和と豊かさの中に、分別をもった連帯感の横溢した人間を、いかにしてつくり上げてい 人間的な連帯感の回復であり、その方向は、同族的連帯から地域的なそれへ、 地

域から国家へ、国家から国際へ、と進む連帯感の発展でなければならない。

れている。そうした国民の思いに道をつけることができてはじめて、 高い連帯価値に向かって、われわれの内発的なエネルギーを引き出すことである。わが こての尊い役割を果たすことになるのである。」 そのためには、 老若男女を問わず社会的な価値の創造に参加し、真の生きがいを見出したい願望に 自他に対する甘え、無気力、無関心、絶望やエゴイズムをしりぞけ、 われわれは、 政治家と より 这国民 駆

克服しようと思索し続けた若き日々の求道者としての大平の真摯な姿が、 びて浮かんでくるのである。 として街頭に立ち、トーニーやトマス・アクィナスを通じて経済活動と人間的価値の分裂を り、それこそが「政治家としての尊い役割」であると説く大平のこの演説には、 人間: 的 連帯 の回復」、 「社会的な価値の創造への参加」こそ「政治の最大の課題」 老成した風格 キリス であ を帯

的、 る。 内 だもの、経済道徳を欠いて利欲の追求のみに走る社会は心貧しきものである。それは 面の豊かさを破壊し、 政治の最大の課題は決して物質的豊かさの追求のみにあるのではない。 文化的貧困こそ最も憂慮する事態でなければならない。 この人間関係の断絶と解体を克服することこそ、政治家の基本的な使命でなければなら 人間と人間との心の触れ合いを断ち切り、社会有機体を瓦 トーニーが 『獲得社会』 豊かさの中 と呼 人間 の精 解させ 神

の演説を次のように続けるのである。 大平はそのための具体的処方箋を「田 園都市国家の建設」 に求めようとする。 大平は、 先

|間設備投資を軸としたわが国のこれまでの経済成長政策は、 いちじるしい成果をあげ

他面内外にわたって多くの衝撃波をもたらした。

われわれはまず、

これらの衝撃波を

たが、

**—** 63 **—** 

緩和し吸収する施策を早急に進めねばならない。

る。 的な豊かさを無限に追求するよりも、むしろ精神的にゆとりのある安定した生活を望んでい 国民生活はいまや公害、物価、 したがってわれわれは、この国民の希望にこたえ、この四つの島に、自然と調和したバ 交通等の面で、不安と緊張が高まってきた。国民は、

ランスのとれた人間社会をつくり出さなければならない。

豊かな田園に変え、その田園を都市にも導き入れた、いわば新しい田園都市国家である。 うな国家 性の高い工業と農業が、また都市と農山村が高次に結合された社会である。……また田 地域によってその要求はきわめて多様であり、画一的なおしつけは許されない。 の田園都市国家は決して今後の経済成長を否定するものではない。それは相互に相補う生産 した形で活かされる社会である。すなわち農山村に住みよい環境と就業機会を作り、これを 上実現するのが新しい世紀に対するわれわれの挑戦なのである。 「 国家は それは激しい都市化傾向を防ぎとめる自動復元装置を持ち、農村と都市のメリットが調 の実現は決して不可能なことではない。これを一億の人口を持つこの四つの島の上 無数の個性的な地域社会によって構成され、これを有機的に統合したものである。 ……このよ 園都

この昭和四十六年の宏池会会長としての政策提言は、

「人間的連帯の回復」をより具体的

に きを教へ、或いは更に進んで全体の為に殉ずる精神を培養する上に与かって力あるものであ 私をして全体と部分との関係を熟察する機縁をもたらし、個人の社会に対する正しい結び付 ある。大平は三十五年前の昭和十一年、卒業論文のなかにこう記している。 的接近という問題意識が、三十五年という歳月を経てなお脈脈と流れていることを知るので 業論文の問題意識であった「全体と部分との正しき関係如何」というテーマへの経済社会学 |都市と農山村」の調和の回復のなかに求めようとしたものである。そこには、 「かかる研究は 大平の卒

うに、 書は内務省、 市』によるといってよいであろう。大平の生誕する三年前のことである。 たのは、 策研究グループの一つである「田園都市構想研究グループ」の報告書が詳しく述べているよ ことであろうと考えられる。大平内閣時代に首相の私的諮問機関として設置された九つ 大平が 「田園都市」(The Garden City)という言葉がわが国にはじめて本格的に紹介 明治四十年(一九〇七年)にまとめられた内務省地方局有志編 「田園都市」という言葉を明確に意識したのは、 大蔵省をはじめ各省への入省者たちの間でかなり広く読まれ続けてきたといわ 恐らくは大蔵省に入省した直 その後、 の報告書 この 報告 の政 園都 され 後

れ<sub>3</sub>3 る。

Tomorrow)の書名で僅かに改定されて出版されたものである。 試みられ、ついで一九○二年(明治三十五年)に『明日の田園都市』(Garden Cities of 三十一年)に『明日―真の改革に至る平和な道』(Tomorrow)と題された著作において そもそも、田園都市に関するエベネザー・ハワードの最初の提案は、一八九八年(明治

都市レッチワースがロンドンの北四十一マイルの地に建設されるに至った。また、一九〇五 実現に着手し、一九〇三年(明治三十六年)には、第一田園都市株式会社による最初の田園 ハワードの提案に賛同した人々は、一八九九年に田園都市協会を創設して田園都市構想の

in Theory and Practice)も出版されている。 年(明治三十八年)には、A・R・センネットの『田園都市の理論と実際』(Garden Cities

と称していた。F・J・オズボーンによれば、公式名称として「田園都市」の名が与えら ニュージーランドの「田園都市」と呼ばれていたし、シカゴもまたみずからを「田園都市」 と古くから広く使用されていた。例えば、一八五〇年に建設されたクライストチャーチは、 けではない。豊かな自然環境に恵まれた都市という一般的な意味において、この言葉はもっ 「田園都市」(Garden City)という名称は、ハワードがはじめて使った新造語というわ

ニューヨーク郊外のロングアイランドであり、一九○○年までにアメリカには、 れた最初の場所は、一八六九年(明治二年)にA・J・スチュアートによって創設された このほかに

ある。 ハワードは「田園からなる都市」であると同時に、「田園のなかにある都市」も「田園都市」と名付けられた九つの村と一つの小さな町があったという。 術上の便益と政治的協同の結婚」であり、この結婚の手段が「田園都市」 の基本理念は、 ものとして、この「田園都市」という言葉に新しい意味を与えた。ハワードの 「都市と農村の結婚」「農村にある心身の健康と活動性と、都市 の建設だったので 田園都 を意味 の知識と技 市

ハワードは、 『明日 の田園都市』のなかで、その理念を次のように述べてい

の広範な関係の象徴であり、広い拡大する共感の象徴であり、科学、 互扶助と親密な協力の父たること、母たること、兄弟たることの象徴であり、人と人との ているように、 磁石はひとつにならなければならない。 人間社会と自然の美しさがともに享受されるように工夫されなければならない。二つの 都市』磁石も、 都市と農村も相互に補完しなければならない。都市は社会の象徴であり、 『農村』磁石も、 男と女が異なる資質と能力によって互いに補 いずれも自然の全計画と目的を表現するものではな 芸術、文化、宗教の象 . 合 相

まうのである。 (M) 徴である。そして農村は、神の人間に対する愛と思いやりの象徴である。 ある。われわれはそれによって養われ、それによって着物を着、それによって暖められ、 所有のそのすべては農村に由来する。われわれの肉体は、それから作られ、それに還るので われわれの生存

生活と新しい文明が生まれてくるであろう。 都市と農村は結婚しなければならない。そしてこの楽しい結合から新しい希望と新しい

のすべての美しさと楽しさが完全に融合した一が存在するのである。」 井上友一博士、生江孝之氏ら内務省地方局のスタッフが、こうした西欧諸国における田園 実際は、第三の選択―すなわち極めて精力的で活動的な都市生活のあらゆる利点と農村 「しばしばそう思い込まれているように、都市生活と農村生活の二者択一があるのではな

省地方局有志編の報告書『田園都市』を取りまとめたのは、すでに述べたように、ハワード 都市建設運動の進展に深い関心を寄せ、 明治四十年(一九〇七年)のことであった。 『明日の田園都市』が公刊され、レッチワースの建設が開始されてから僅かに四、五年後 実地調査の上、「徹宵、非常なる努力を以て」 内務

それは、英国ならびに欧州大陸諸国における田園都市建設の最初の動きを詳細に分析、 紹

づくり、農村づくりの方向について、多くの分析と提案を試みた貴重な歴史的文献であっ 介するとともに、近代産業社会の発展がもたらす社会問題を鋭く分析し、 日本の今後の都

生するなど、 生していた。 路にさしかかりつつあった。明治三十八年のポーツマスの日露講和条約の調印をめぐって、 至っていたのである。 道を選ぶか、民生民力の安定充実に力を振り向けるべきか、 これを屈辱的講和とする猛烈な反対運動が起こり、日比谷では焼き討ち事件などの暴動が発 直後である。この頃、 言うまでもなく、明治四十年という年は、 明治三十九年には第一次西園寺内閣が成立、翌四十年には足尾銅山 労働争議が激化し、産業化、近代化をめざす日本は、 日本はある意味で、外交・内政の両面において重要な歴史的選択 日本が明治三十七、 戦後経営の難しい 八年の日露戦争に 海外膨張、 軍事大国 局面 の暴動が発 勝 に 刹 の岐 した

た。 総合雑誌 月に出しているが、 大平正芳の生まれた明治四十三年(一九一○年)、当時のほとんど唯一といってよい 明治維新以来の「殖産興業」 『太陽』 (博文館発行)が、 「一等国」という言葉は日露戦争後の時代の流行語のひとつであ 「富国強兵」による「追いつき、 「壹等国」と題する臨時増刊号 追い越せ」が、 (第十六巻第二号)を 日露戦争 月 刊

自信とうぬぼれがその背景にあった。だが、他方では、 の勝利によって一応達成され、日本もようやく「一等国」なみ、先進国なみになったという 「一等国」とうぬぼれるのはまだ早

い、と自重自戒を求める声も決して少なくなかった。

例えば、森鷗外は同じ年に『普請中』という短編を書いているが、そのなかで主人公に

のち「日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ」と語らせている。 りである。……外に板囲いのしてあるのを思い合わせて、普請中だなと思う」と述べさせた 「あたりはひっそりとして人気がない。唯少し隔たったところから騒がしい物音がするばか 日本で最初の田園都市に関する内務省地方局の報告書は、まさにこの明治末期の日本の普

に 時代的背景のなかで書かれたものであった。そのなかで、この報告書の執筆者たちは、第一 請中に書かれたものであり、「一等国」日本の現状と将来をめぐって論議が高まりつつある . 西欧先進国の産業化、近代化のもたらす社会病理現象、特に都市と農村の分裂、 人間的連

いたのである。この報告書はその目的を次のように述べていた。 社会の特質を生かしつつ、日本の普請の方向を見定め、そのデザインを描こうと努めて 家族、地域社会などの解体現象に危機意識をもって取り組み、第二に日本の文

「都市を重んぜんか、また農村を主とせんか。二者ともに一得一失あるをまぬがれずし

ことを唱えて、 ついに両者のひとしくゆるがせにすべからざるを認め、都市農村の両者かならず相須つべき 国は爾来幾多の経験を経て、これらの問題を講究することすでに多年、 そのひとつに編重するは、 相互の調和とを完うするをば、 ここに二者の複本位論を生じ、 すなわちそのひとつを曠廃せしむるにほかならず。 一国興新の第一要義となすに至りぬ」 中央と地方とを通じて、いっせいに全局 最近におよびては (報告書 泰西の諸

三頁

洗い去りて、 茂川の水、 く、秋は西山の紅葉二月の花よりも紅にして、路行く人の節を停めしむ。清栄玉のごとき加 明もっとも天然の風光に富み、春は東山の桜狩り、人はさながらに雲霞のうちを行くがごと にまた一 実体につきてこれを言わば、なんぞかならずしもひとつの「田園都市」なしといわんや、あ 『田園都市』 種の 翠緑滴るがごとき吉田 一段の爽気を与ふるなからんか」 「花園都市」なるものなしとせんや。これを当年平安の旧都に見ずや、 『花園都市』の名は、 の杜、 絶えてわが邦に聞かざりしところなり。 かかる自然の風趣は、 (同報告書、 三五一頁 それいかばかり市人を塵胸 されどその 山紫水

較することは勿論できない。 露戦争後の明治四十年代の世相と、 しかし、 明治四十年代の空気を吸って生まれ、 高度経済成長後の昭和四十年代の世相とを単 大蔵省入省とと 純 に比

印象は強烈なものがあったと思われる。それはトーニーの近代産業社会批判の視点とも交錯 もにこの内務省地方局有志編の報告書『田園都市』を手にした大平にとって、この報告書の 「近代を超える」という大平の基本的問題意識へと連なっていったのである。

大平の「楕円の哲学」のいわば曲線的思考法が見られるといってよいであろう。 の中心として、ともに相互に補完し合い、調和すべきものとして認識されている。ここにも 都市と農村はここでも対立した二極として取り扱われてはいない。それは近代社会の二つ

済社会史を探究した大平にとっては決して対立する二極ではなかった。「近代を超える」た 大平の時代認識のなかにあって、都市と農村が二つの中心となって描きだす楕円軌道のな 「近代」と「前近代」(中世)もまた、トーニーやトマス・アクィナスを通じて中世経 **一人間的連帯の回復を可能にする「近代を超える社会」の姿が浮かび上がってくるよう** 

う二つの中心によって描きだされるものであった。

めの楕円軌道は、

大平の思考のなかにあっては、むしろ「近代」と「前近代」(中世)とい

## 老子とトマス・アクィナス 東西の自然法思想の融合

すべきものであって、 従って人間の高い道徳性と結び付いたものであった。大平のいう「価値」は、 大平の政治哲学の描く「道」だったのである。 もたらすようなことを断じてしてはならない。この「人間的価値」 より高い、より包括的な「人間的価値」であった。政治はこの「人間的価値」の実現をめざ 的価値」ではなかったのである。大平のいう「価値」は「経済的価値」をはるかに越える、 欲」のみを求めてやまない競争原理ではなく、むしろ自然法と深く結び付いた神の摂理 大平の理解した市場経済の原理やアダム・スミスの「神の見えざる手」は、決して 「経済的価値」のみの追求によってかえって「人間的価値」 の描きだす楕円軌道こそ 単なる「経済 の破壊を 利

ることはしない。 するものであったが、本論文ではその点についての考察は他の筆者に委ねてこれ以上立ち入 大平の自由主義の経済学と保守主義の政治学の両者は、 実にこの深い自然法理解を基礎と

は流転する。 まことに、道とは、 それが宇宙の根本法則であり、 老子のいうように「道の道とすべきは常の道にあらず」である。 普遍存在としての道の運動形式である。この転

変する巨大な動きのなかにあって、眇たる人間の私意がなにほどの力を持つであろうか。む り宇宙観、人間観、世界観であった。 の境地が開けてくるであろう。物事をすべて変化において捉える。これが老子の自然観であ しろ進んで変化のなかに身を投じ、必然の動きに順応し、一体化せよ。そこに限りなく自由

じ、これを畜う。生じて有せず、なして恃まず、長じて宰せず。これを玄徳と謂う」 からんか。天門開闔して、よく雌たらんか。明白四達して、よく無知ならんか。これを生 し、よく嬰児たらんか。玄覧を滌除し、よく疵なからんか。民を愛し国を治め、よく無為な 老子は言う。「営魄を載せ一を抱き、よく離るることなからんか。気を専にして柔を致

う。 守っているだろうか。自然の変化のなかにあって、受身の立場に徹しているだろうか。 迷いを拭い去るに、欠けるところはないだろうか。民を愛し国を治めるについて、無為を せながらも支配しない。これが道の底知れぬ徳である」ということである。 の理を究めるにあたって、知の限界をわきまえているだろうか。道は万物を生み、万物を養 か。自然の気を保って柔弱なること、嬰児のようでいられるであろうか。知識を万能とする その意味するところは、「一面的なものの見方を捨て去って、道から離れずにいるだろう 万物を現象させながらもその現象を固定させず、存在させながらも功を誇らず、完成さ

スの『神学大全』は主張する。 するならば、それは直ちに法ではなくなり、法の堕落に過ぎなくなる」とトマス・アクィナ 出される限りにおいてのみ、法的な性格を持つ。だがもしどこかで、それが自然の法と矛盾 思想であったことは言うまでもない。「人間が作るすべての法は、それが自然の法から導 ナスの自然法思想理解を通じて、東西文化の根底にある深い共通性を発見したのである。 老子の言う道とは、 トーニーも指摘しているように、中世の経済道徳の哲学的根拠となっていたものが自然法 東洋の自然法思想といってもよいものである。大平はトマス・アクィ

る。 属しているものだという考え方であり、二つは、 えることになったものである。すなわち一つは、経済的な利害は人生の本務である救い え方には二つのものがあって、そのどちらも、十六、十七世紀の社会思想には深い影響を与 殊な貢献よりもさらに大切なのは、その前提となった考え方であった。 ところは、かなり大きい。しかし、中世の著作者たちが、経済理論の技術的な点に与えた特 トーニーは、 「後世の重商主義者の思想が貨幣や価格や利子などに関するスコラ哲学者の理論に 中世の神学体系が経済社会理論に与えた大きな影響について次のように分析 『獲得社会』(一九二一年)ののちに書いた『宗教と資本主義の興隆』 経済的行為は人格的行為の一面であるか かれらの根本的 負う のな

けられる手段のようなものである。 非道徳的なことに思われたのであろう。それは、闘争欲や性欲のような必要な人間 ないような経済的な行動はまったく考えられていない。射利心は一定の計量可能な力であっ 賛するほど、ひとびとは下賎でもない。他の強い情欲と同じく、必要なのは手綱をゆるめな 同じことだと考えられたわけである。外なるものは内なるもののためにある、というのが掟 無拘束な発動をば社会哲学の前提とすることが合理的でもなければ道徳的でもないのとほぼ 仮定の上に、一つの社会科学を基礎づけることは、中世の思想家にとっては、非合理的な、 て、他の自然力と同じく、不可避的な自明の所与として受入れられなければならぬ、という いで、これを抑制することであると考えられた。中世の経済理論では、道徳的目的に関連の さいものだ。それは力強い欲望であるから、ひとびとはこれを恐れるのだが、またこれを称 て、その国の天然資源を考慮に入れるものだ。しかし、経済的な動機というものはうさんく きないからである。聖トマスもいったように、賢明な統治者は、国家の基礎を置くにあたっ いうのはそれなくしてひとびとは自己を支えることができず、おたがいに助け合うこともで ら、それはその他の側面と同じく、道徳の規範に拘束されている、という考え方である。と 経済財は手段にすぎない―あたかもわれわれがそれによって、浄福へと赴くのを助 の属 性

ないのである。 」 アントニーノのいうように、富は人間のためにあるのであり、人間が富のためにあるのでは の手段として役立つ限りにおいて、祝福の助けとなるものだと、考えなければならない』聖 のようにそれを第一義的なものとせず、どこまでもそれはわれわれの肉体の生活を支え徳行 『この世の幸福を望むのは法にかなったことである。が、あたかもこれに安住してい 、るか

はない。 している。 まな対概念が、 思想を中心とする楕円の哲学であった。しかし、大平の政治哲学のなかの楕円はそれだけで 大平の政治哲学は思想史的に見ると、老子とトマス・アクィナスという東西二つの自然法 競争と協調、 大平の意識のなかでは緊張と調和のなかで楕円軌道を描きつつ芸術的に均衡 個人と集団、 世俗と宗教、自由と規律、部分と全体など、 実にさまざ

と究極の人間的価値である真善美 して認識されている。そしてその螺旋軌道はただ循環しつづけているのではなく、 道を描きながら時間軸にそって螺旋状の運動を続けていく「永遠の今」となる。 しかし、そこにもう一つ時間軸という複雑な構造を入れるとき、大平の政治哲学は楕円軌 近代―超近代は単純な単線的構造ではなく、螺旋状につながる楕円軌道をなすものと ―神概念に向かって上昇していくのである。 前近代 中

の点」=Ω点に限りなく近づき、収斂していくという「人格化する宇宙」のイメージにも似 それは古生物学者ティヤール・ド・シャルダンの『現象としての人間』 のなかの、「終局

実際に人格化されるようになる。というよりもむしろ人格を超えたものになる。 完成させる。……宇宙を思考し、受入れ、宇宙に働きかけるためには、逆の方向ではなく、 うにして進むはずであり、その点がすべての層を一つに融合させ、それぞれの自己のうちで むかって交叉し、互いに同時に頂点に達する。 のと人格的なもの(つまり「中心の定まったもの」)は矛盾しあうのではなく、 われわれの魂の彼岸を観察しなければならない。精神発生の立場からすれば、 限のない層は、 は意識を含み、生み出すから、必然的に収斂する性質を持つ。だから適当な方向にむかう際 われのすべての難題とすべての反撥は全体と人格との対立に関しては消滅する。 るというだけでなく、また一点に集中している全体であることをも理解する場合だけ、 ティヤールは言う。 ある「点」―それを「終局の点」(Ωの点)と名づける―へいわばうねるよ 「精神圏が、そして最も一般的に宇宙が、構造的に単に閉ざされてい 時間と空間が 空間 同一方向に 宇宙的なも :時間

従って、われわれの存在と精神圏の延長を非人格的なものの側に探し求めることは誤って

いる。未来の宇宙は終局の点において人格を超えるものにほかならないであろう」

う。しかしなお、大平のなかの「老子」はこう呟くのではあるまいか。「どうして西欧的理 うの意味なのではないか」 えるものを、人格は知ることができない。ティヤールには『無知の知』がまだまだ不足して 性というものは、すべてを単一の点に収斂させないと気がすまないのであろうか。人格を超 妙なる道であり、『道の道とすべきは、常の道にあらず』(『老子』)ということのほんと いるのではないか。宇宙は「終局の点」にむかって収斂しつつあるというよりは、しずかに 『無』と『空』のなかをゆっくりと循環し、旋回しているのではないか。そしてそれこそ玄 恐らく大平はこの古生物学者ティヤールの卓越した見識に、深い共感を示すことであろ

ば窮す。中を守るに如かず」だ、と。 天地の間は、 それ嚢籥の如きか。 虚にして屈せず、動きていよいよ出ず。多言はしばし

1 大平正芳回想録刊行会編 『大平正芳回想録 資料編』(一九八二年)三九二頁

君子盛徳容貌若愚」『史記』「老子伝」

2

「良賈深蔵若虚

- 3 大平正芳著『素顔の代議士』(二十世紀社、一九五六年)九~一〇頁
- 4 『老子』(徳聞書房、一九七九年)三六~三七頁

「有老人、含哺鼓腹撃攘而歌曰……」『十八史略』「五帝・帝堯陶唐氏」

5

- 7 6 張養浩『為政三部書』(安岡正篤訳、明徳出版社、一九八一年)三~二三頁 大平正芳著『私の履歴書』(日本経済新聞社、一九七八年)四九頁
- 8 大平正芳記念財団編著『大平志げ子夫人を偲ぶ』(一九九一年)二三二頁
- (9) 前掲書、『私の履歴書』三○~三一頁
- 10 (一九八一年) 三六七頁 宮沢健一「大平哲学のふるさと」(大平正芳回想録刊行会編『大平正芳回想録 追想編』 所収
- 11 R.H. Tawney: The Acquisitive Society, G.Bell and Sons LTD. 1952
- 12 〇四頁 大平正芳「職分社会と同業組合」(前掲書、『大平正芳回想録 資料編』所収)一〇三~
- (1) 前掲書、『大平正芳回想録―資料編』一〇四~一〇五頁
- (4) 前掲書、『大平正芳回想録─資料編』一○五頁
- トーニー著『宗教と資本主義の興隆』(岩波書店、一九六二年)下巻、二一六頁

- 16 『神学大全』、創文社、一九六〇年) S. Thomae Aquinaties: Summa Theologiae, I a 2ae, quae.91,art,I and 2. (トマス・アクィナス
- (17) 前掲書、『私の履歴書』二一~二三頁
- (1) 前掲書、『大平正芳回想録─資料編』一○五~一○六頁
- (1) 前掲書、『大平正芳回想録─資料編』二○六頁
- (2) 前掲書、『大平正芳回想録―資料編』二〇八頁
- (22) 前掲書、『大平正芳回想録― 資料編』一〇五頁

21

前掲書、

『大平正芳回想録

資料編』二一〇~二一二頁

大平総理の政策研究会報告書―2、 田園都市構想研究グループ『田園都市国家構想』(大蔵省

印刷局、

一九八〇年)

- 24 25 Ebenezer Howard: Garden Cities of Tomorrow, The Town and Country Planning Association. 内務省地方局有志編・香山健一解説『田園都市と日本人』(講談社学術文庫、一九八一年)
- 「エベネツァー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、一九七五年)
- (26) 前掲書、『明日の田園都市』八三頁

27

前掲書、

明日の田園都市』

八四頁

<u>81</u>

(28) 前掲書、『明日の田園都市』八四頁

享受させようとした事や、近くはアイゼンハワー大統領が安くつく政府 (Cheap goverment) ではない。アダム・スミスが、国家の機能を出来る丈制限して、市民社会により多くの自由を すでに昭和二十八年、大平は「安くつく政府」と題して次のように述べている。 「要するに財政の哲理は税金を少くすることと公金を大切に使う事に尽きるといっても過言

を作り上げる事に腐心している事も、煎じつめればこの財政の哲理を実践に移そうという苦心

に他ならないのだ。

どうして作り上げるかという事がその悲願であらねばならないと私は思う。」(前掲書、 た。誠に悲しむべき事である。これからの政治は、この弊風を如何にして是正して安い政府を 膨張を重ねて来たし、税金は益々重くなり、全国津々浦々に怨瑳の声を聞くようになって来

ところが満州事変以後今日に到る迄のわが国の財政は、中央といわず地方といわず、

した「保守と革新」のなかで次のように論じている。 また、保守合同の行われた昭和三十年一月に、既に大平は保革対立の無意味なることを主張

顔の代議士』一〇六~一〇七頁)

「今日の日本における保守と革新の対立は、今日のようなあり方では全く無意味であって、

膨張に

34

前掲書、『老子』四二頁

実効性ある論議を展開することが何よりも肝心である。」(前掲書、 片の戯画にしかすぎないとみられよう。いち早く両者は共通の分母を掘り求めて、その上で 『素顔の代議士』二〇一

こうした大平の自由主義、 保守主義の哲学については、 別にあらためて詳細に論ずることとし

7

頁

(30) 前掲書、『老子』四八頁

(32) 前掲書、『宗教と資本主義の興隆』六八~六九頁(31) 前掲書、『神学大全』、第一部の二、第四十五論題、第二項

Pierre Teilhard de Chardin : Le Phenomene Humain, Edit, du Seuil, Paris, 1955. (ティヤール・ド・

シャルダン『現象としての人間』、美田稔訳、みすず書房、一九六四年)、三〇二~三〇三頁

<del>- 83 -</del>